ライオネルのメール

普通男ならば、女性に、それも幼さの残る愛らしい少女に頼られれば、嫌な感情など持ち合わせやしない。むしろ頼られることを誇りにすら感じるだろう。

例えば、

「お願いします……私、どうして良いのか解らなくて……」

などと、今にも泣き出しそうな、そんな瞳を向けられながら懇願(こんがん)され、さらには

「他に頼る人がいないです」

とまで言われてしまえば、

「大丈夫、俺に任せとけ！」

と、後先考えずに安請け合いしてしまっても、誰が彼を攻められようか？

たとえ、少女の願いが少女自身のことでなく、結果的にただの小間使(こまづか)い的な役割を背負い込まれただけだとしても、誰が彼を笑えようか？

少なくとも、男ならば彼に同情出来るだろう。

§§§

「ああ、マーちゃんは気にしなくてもいいのよ。ただね、この男が空回りしているのが可笑しいだけ」

厳密に言うと、依頼元は少女ではない。そこにアナの言う空回りの原因がある。

「姫を守る騎士（ナイト）のつもりでいた、この男がね」

声を上げ笑い出したアナに、アッシュは顔を赤らめながらも無視を決め込み、先へ先へと歩を進めることでしか抗議できなかった。そんな二人の様子に、少女はどうしてよいものかとオロオロし、そんな少女をクロエはいつもの事だからとなだめる。

少女の依頼は、少女の下（もと）にＢＥＥメールで救援信号を送った送り主を救助する事。つまり助ける（守る）べき相手は少女（姫）ではなく、メールの送り主という事。

しかしそれでも、確かに少女は困っている事に代わりはなく、そんな少女に手を差し伸べたアッシュを笑う事はないだろう。

「はは、いやぁ今思い出しても笑えるよね。「アナ、マァサが大変なんだ。手伝ってくれ！」だってさ。大変なのはマーちゃんじゃないってのにさ」

空回りを別の言葉に置き換えるならば、早とちりと言うべきだろう。

少女の懇願。そして涙。それだけで、騎士になった気でいたアッシュは、まさに風車に向かうドンキホーテ。たしかに、これは笑い話以外の何物でもない。

§§§

だ。
　しかし、救援するにも問題があった。どうやら救援主は自分が何処にいるのか正確に伝えられないらしい。解るのは、「雨がひどい。ここは森なのだろうか……周りの壁はつたで覆われている。まるで井戸の底にいるようだ」というメッセージだけ。
　そしてもう一つの問題。それはアンドロイドである依頼主は、残りのエネルギーが少なくなっているらしい。アンドロイドにとってエネルギー切れは、そのまま死を意味する。
　ハンターズとして、フォースとして、まだまだ駆け出しのマァサには、この難解で、しかも時間のない依頼に対して途方に暮れていた。助けを求められては無視するわけにもいかない。しかし自分一人ではどうしてよいものか解らない。
　と、そんな時に、マァサはたまたまアッシュを見かけた。藁(わら)をもすがる思いで彼の下に駆け寄り、必至に、涙を浮かべながら「助けてください」「時間がないんです」「自分だけではどうしようもない」などと言葉を並び立て、協力を仰(あお)いだ。もちろん、幼いマァサに落ち着いて状況を説明するゆとりなどあるはずもない。
　こうして、マァサ(姫)は悪気無く哀れなアッシュ(騎士)を笑い(ドンキホーテ)のネタに仕立て上げてしまったのだ。

§§§

「おーい。聞こえるかー？ここだよ、ここ」
声はどこからかする。
「？……どこだ？」
声はすれど、姿は見えず。
コツン
「痛っ！」
マァサが何かを蹴飛ばした。その時、また声がした。
「？」
気付いたマァサが蹴飛ばした者を確認した。
それは……。
「キャァァァァァァ！」
「どうしたマァサ！」
姫を守る騎士（ナイト）の出番。ここぞとばかりに、アッシュはマァサの下にすぐさま駆けつけた。
「あっ、あれ……」
マァサが指さした先。そこには、一つの生首が転がっていた。
「どうわぁっ！」
さしもの騎士（ナイト）も、驚きのけぞる。いや、この程度で驚いて、姫が守れようか？
「何驚いてるの。よく見なよ、アンドロイドの首だよ」
ひょいと転がっていた首を持ち上げながら、アナが二人に良く見せた。
確かに、それはアンドロイドの頭部パーツ。生首などではなかった。
「君！もしかして私を助けに来てくれたのか？」
そのパーツが、突然しゃべり出した。どうやら、先ほどからの声は、このパーツが主（ぬし）だったようだ。
それは解る。解るが、やはり突然話し出せば……。
「いや、すまん。驚かせるつもりでは……」
二人がまた驚き、地べたに腰を落としてしまっても仕方のない事かもしれない。
「なっさけないわねぇ」
少なくとも、マァサは仕方ないだろう。ただやはり、アッシュはどうにも、格好が悪い。
「……コホン。で、あんたはその……元々そう

いう人なのか？」
土埃（つちぼこり）を払いながら、わざとらしい咳払いと共にアナが持つ首だけのアンドロイドに質問をした。
「いや、れっきとしたアンドロイドハンターだよ。ちゃんとハンター登録もある……って、あー、身体！そう、身体だよ！」
どうやら、ハンターライセンスを提示しようとしたところで、自分の置かれた状況を再認識したようだ。
「えーっと……ライオネルさん……ですよね？マァサです。メールをくださったのはあなたで間違いないですよね？」
この状況では、間違いなく彼が救援メールの送り主なのは火を見るより明らかなのだが、律儀と言うべきか、マァサは状況の確認をきちんと行っていく。
「ああ、私がライオネルだ。そうか、メールはあなたに……いや、実はこういう状況なので、誰にメールが渡ったのかすら……おっと、レディーを前にこんな姿で失礼」
なんとも、二人のやりとりは紳士で律儀と言えるが、この情景の見ては、そうはとても思えない。
女性が両手に首を持ち、少女がその首と会話する。この情景を間抜けと言わぬならば、なんと表現すべきだろうか？しかも会話がなんとも生真面目（きまじめ）なのが、さらに場を間抜けにしている。
「探索中、得体の知れない化け物に襲われ、ボディパーツがかなり損傷してしまってね」
間抜けながらも、首だけの依頼主ライオネルはいきさつを語り出した。
「命からがら逃げ出したのは良かったが……それからがひどかった」
アンドロイド故、表情を変えずに語り出すライオネル。さながら首というラジカセを通じてメッセージを聞いているかのようにすら感じてしまう。
「足がもげ、腕を落とし、胴体も奪われた。そこでお願いだ！バラバラになった私のパーツ

を、なんとか全部探し出してくれないか？礼は必ずする。頼むよ！」
つまりは、救助も依頼も、まだ終わりではないということを告げていた。

§§§

た。
「……アッシュ、おめでとう。どうやらビンゴみたい」
ライオネルがあたりを付けた場所には、熊の名を持つ大猿が一匹、待ちかまえていた。
「マジかよ……えぇい、とりあえず殺ってやる！」
半ばやけくそ気味に、アッシュは一人大猿に突っ込む。
「ちょっ……もう。アッシュ君のこの癖、どうにかならないかな」
投剣でアッシュを援護しながら、勇敢に立ち向かう若きハンターを嘆いた。
「せいやっ！」
しかしながら、強敵とはいえ大猿相手ならば、アッシュ一人でも十分に渡り合えるほどの力は身に付けている。
柄の両端からフォトンの刃がのびた武器、ダブルセイバー。まだまだ使いこなしているとは言い難いものの、様になりつつある。
「っと！」
振り上げられた右腕を見、アッシュはすぐさまその腕が振り下ろされるよりも早く相手の左側へと回り込む。大振りした右腕は、虚しくブンという音を立てただけで終わった。
大猿はかなりの力を持ち合わせている。そのため、たった一撃が命取りになりかねない。しかしながら、動作が少しばかり鈍く、また行動パターンも単純な方だ。
慣れてしまえば、対処は難しくない。そう、アッシュは慣れるだけの鍛錬は積んでいるのだ。
ザシュッ、ザシュッ！
両剣一振りで斬りつけ、相手が苦痛に仰け反っている隙に後ろへ回り込み、腕の直撃を避けるようにする。単純だが、確実に仕留める方法。
ズンッ！
程なくして、大猿は膝を突き、前のめりに倒れ込んだ。

「ふぅ……さて、問題はこれからだが……」
振り返り、本来の用件をどう解決しようかを相談しようとした。が……。
「さ、マーちゃんも離れてようねー。ばっちいの見ちゃうから」
「じゃあアッシュくーん、後お願いねーっ！」
「あーっ、お前らズルイぞ！」
既に遠ざかった三人にとって、アッシュの遠吠えは虚しい木霊（こだま）にしか聞こえなかった。

§§§

パーツは本人で無い限り、持っていても仕方のない物。彼らのように依頼という理由があるならまだしも、他の者には何の意味も持たないはず。

「大昔なら、パーツだけでも取引されたらしいけどなぁ……」

アンドロイドの自立を認められて以降、不当なパーツ売買を強く規制されるようになった。人身売買や内蔵売買と同様のものという認識が成された為に。

その為、アンドロイドのパーツは本人が修理や交換をする際でない限り、正規には売買されない。

「……あ、もしかして……裏？」

そう、正規には売買されずとも、裏でならあり得る。

「裏……ですか？」

しかし当然の事だが、裏はあまり表では知られていない。ましてマァサのような少女（ルーキー）では、知らなくても恥ではない。

「んー、マーちゃんは気にしなくていいよ」

「？」

気にはなるが、ここは先輩の言うことに従うのが無難だろう。素直な少女はそう判断した。

「裏か……だとしたら厄介だぞ。ブラックペーパーにでも流れてみろ。取り戻すのは絶対に無理だ」

まして、今どこにあるのかさえ見当が付かない。流れを止める手だて以前の問題だ。

「……あてはあります」

クロエがここで突然、光明を見いだした。

「実は……ライオネルさんの頭を見つける少し前、不審な人物を見かけたんです」

「不審な人物？」

こくりとうなずき、クロエは話を続けた。

「見かけはレンジャーのようでしたが……なにやらこそこそと、私達に見つからないようにして立ち去ったので……余計に目立ってたんですよ。その時は気にもしていなかったんですけど……もしかして……」

そのレンジャーが怪しい。言葉にはせずとも、クロエの話に皆がそう思った。
しかし問題はまだ残っている。
「そのレンジャーをどうやって捕まえる？」
至極当然で、重要な問題だった。
「人物さえ特定できれば、後は簡単ですよ。ね、アナ」
蛇（じゃ）の道は蛇（へび）。それもまた、至極当然の理（ことわり）である。

§§§

ああ、とアナは手を叩いて納得した。
アッシュもマァサとは違う純粋さを持っている。不正を見過ごせない熱血漢が、この不正だけで成り立つ市場で黙っていられるとは思えない。
黙っていられないのは、単純に子供だとも言える。たしかに、アッシュはそういう意味で大人になりきれていない。
「それはそれで、あの子らしいじゃない」
大人だとか子供だとか、ニューマンであり、寿命の不安定な彼女達にはどうでも良いこと。精神年齢がどうであれ、それもまた個性の一つ。
「無理に汚れることなんか無いわよ。汚れって……そうそう落とせる物じゃないから」
寂しそうに笑う妹を、姉は同じく寂しい笑顔で返す。
ずっと二人だけで、生き延びてきた。その道のりには、汚れずにはいられない泥沼も点々と存在していた。
それはアッシュにもマァサにもあるだろう。
ただ、彼らと姉妹では、道幅が違う。
避けて通れるなら、わざわざ泥沼にはまる必要はない。
「……ん？あいつ……かな？」
感傷に浸る時ではない。クロエは見覚えのある顔を見つけ、アナに声をかけた。
「どうだいどうだい。いいもんあるよ！」
道行く人に、しきりと声をかけるレンジャー。間違いなく、ここで商売をしようとしているのは明らかだが、あまり慣れているようには見えない。
「……あー、あいつ。見覚えあるわ。ほら、前に私がお痛した時、あの時に見かけたことあるよ」
アナのお痛。かつてアナはブラックペーパーという闇の組織にいいように扱われ、彼らの企みに荷担させられていたことがある。幸いにもクロエが雇ったハンターにその企みを潰され、アナも更生したということがあった。
「という事は……まぁ裏に通じてるのだけは確

かね」
確信を持って、二人は商人に徹しようと必至なレンジャーへと歩み寄った。
「良い物って何？お兄さん」
慣れた感じで、声をかけるアナ。
「おう、ねえちゃん。いやぁ……ねえちゃんには必要ない物かもなぁ」
もったいつけることで、余計に興味を引きつけようとする、商人ならではの駆け引き。いや、クロエはそうでないと見切った。
「私達ね、アンドロイドのパーツを探しているの。持ってない？」
とてもアンドロイドのパーツを欲しがるようには見えない。だから本当に必要ないと思ったのだろう。駆け引きではなく、素で答えたようだと、クロエは睨んだ。
なにより、目の前の男は商売の駆け引きに長(た)けているようには見えない。
「おお、そうなのか。いや実はさ、ちょうどアンドロイドのパーツを手に入れてよ……」
その証拠に、クロエの言葉を疑うことなく、すんなりと話に乗ってきたのだ。
「これだ。ボディーと左腕だけだがよ、ばらけただけでまだまだ使えるぜ」
加えて、どうもアンドロイドのパーツに関しての知識は無いらしい。解っているのは「裏では金になる」ということだけのようだ。
「これこれ、これを探していたのよ。じゃ、貰っていくわね」
有無を言わさずパーツを奪い取り、そのまま立ち去ろうとする姉妹。
「おっ、おいおい。金払って行けよ！それは俺が……」
「あなたが、森で拾ったパーツなんでしょ？悪いけど、これ本来の持ち主が探していてね。それとも、あくまで自分のだと主張する？あまりそれは得策じゃないと思うけどなぁ」
振り向きざまにクロエが男の言葉を遮り主張すると同時に、アナはセイフティーを外した短剣(ダガー)を、男の脇腹に押し当てていた。

「……ここでそういう事を言い出すか？」
裏市場で、正当な所有者など問いただす方が反則（タブー）だ。そして余所（よそ）ならまだしもここでの窃盗はマナー違反。男はそれを主張している。
「ここが何処だってかまわないわ。私達は、ハンターズギルドのメンバーとして依頼をこなすだけ。文句があるなら、ギルドを通しなさい。あなたもギルドのメンバーならね」
ぐうの音も出ない。男は、言葉と短剣（ダガー）の脅迫に屈するしかなかった。
「ああいう小ずるい男よりも、自分の方がこういう事に長けているというのも……嫌なものね」
あの子がいると、こういう方法も出来ないし。そんな事を思いながら、姉と共に依頼者の下へと急いだ。

§§§

ら右腕を取り出したくらい。それを彼は汚れ役と評(ひょう)しているようだ。
「なーに言ってんだか。君はね、まだまだ騎士(ナイト)には早いのっ！」
パンッ、と背中を強く叩き、アナは豪快に笑い飛ばした。
そんなアナに、アッシュは口をとがらせるだけ。
本当の汚れ役は、汚れた所を見せないもの。白馬の王子は白いままでいればいい。ほんの少しの皮肉を込めて、アナは将来の王子様(アッシュ)をそう心の中で評した。